

「文化財保存活用地域計画」総合調査から⑩

先月は、津久見市の歴史文化の特性と関連文化財群について－文化財の把握調査から見てくるもの－というテーマで、市内の文化財の所在状況とその概要について紹介しましたが、少しかたい内容となってしまいました。

現在までこの計画作成のため文化財の把握調査を実施してきましたが、身近にあったのに気がつかなかったものや、今まで名前は聞いたことがあるがどういふものかは知らなかったという文化財も多くありました。

そんな中から皆さんに知っておいてもらいたい文化財を二件選んで紹介します。

さいきょうじ かえるまた ほ りゅう 西教寺の臺股に彫られた龍

写真は、西教寺（浄土宗本願寺派）の本堂に残る臺股です。

「臺股」とは、建物に横木（梁や桁）を設置し、荷重を分散して支えるために、下側が広がっている建築部材のことで、ここ西教寺の臺股には龍の彫刻が施されています。

「この西教寺の臺股は、幕末から明治・大正にかけて大阪を中心に活躍した細工人（杜寺彫刻）小松一門の手によるもので、その作風に加え、裏面に墨書で「小松源助」の名前が記されていることから、八代目源助により制作されたものであること、さらに小松一門の作品としては、今までは、愛媛県伊方町の山車で確認されたものが最西端とされてきましたが、今回の調査で、西教寺の臺股が最も西にある作品である。」ということがわかりました。

普段見過ごしがちな文化財でも、貴重で魅力があるものもあることを実感しました。



←市ホームページで写真を
ご覧いただけます



つく みようがい “津久見要害” みやまお ねすじ のこ ちゅうせい やまじろ 一宮山尾根筋に残る中世の山城－

正面の小高い丘は、大友宗麟の館城（大友松野系図には「岩屋茶亭」とある）があったとされる大友公園です。

その背後にある宮山の延長線上に「津久見要害」と呼ばれる中世の城郭遺構が確認されています。

「要害」とは険しい地形に築いた砦のことです。その縄張り図（城全体の平面図）から三方の尾根を切り落とした陣所にしていたことがわかっています。

市内徳浦の薬師寺家（一族は中世の水軍衆）に数多く残る古文書の中に津久見要害の存在を記す貴重な史料があります。「大友義統感状」という大友義統（宗麟の嫡男）から薬師寺兵庫助に宛てた書状（天正15年（1587）正月廿八日）には、

今度薩摩之悪党国中へ現行之刻、於津久見要害、別而辛勞之由、感入候、然者依不慮之成立、丹生嶋籠城之由、忠貞之心懸神妙候 一後略一

とあり、前の年の天正14年、島津軍の豊後侵攻を受け、宗麟がいた津久見一帯でも激しい戦闘が繰りひろげられました。その時、兵庫助は津久見要害にいたが、不慮之成立により丹生嶋城（臼杵市）に移り立て籠もりよく仕えたとし、その軍労を賞した（褒めたたえる）ものです。不慮之成立とは、島津軍の侵攻が思ったより早かったことを示しています。

当時、この津久見要害は、宗麟の館城をはじめ津久見一帯を守る最も重要な山城だったと考えられています。

臼杵市教育委員会が保管する絵図には、天正14年の島津氏の豊後侵攻時と思われる激戦地や城、陣などを記した藩領絵図が残っており、その絵図には、津久見・青江地域の山の稜線上に物見山と古陣所が設けられ、その一帯で「小セリ相（小競り合い）」が、さらに解脱闇寺付近や小園などで「大勝負」（決戦）があったことなどが記されており、この時の島津軍の豊後侵攻、その激戦地は青江川流域であったことを知ることができます。

（『津久見門前遺跡』九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（4）2005大分県教育庁埋蔵文化財センター）



令和6年度 大分県立歴史博物館出張展示

「石灰で魅せるおおいたの歴史と文化 ～左官の技～」

津久見市には良質な石灰を埋蔵する鉱山があり、少なくとも寛政3年（1791）には石灰の利用が始まっている。現在では、セメント業などの石灰を使った産業が盛んである。

当館が所在する宇佐市周辺では、石灰（漆喰）をつかった「縋絵」と呼ばれる装飾が、全国的に見ても多く分布しており、当館でも関連資料を所蔵しているため、大分県内で石灰を活用してきた文化と歴史について紹介する。

〇問い合わせ 津久見市教育委員会 生涯学習課 地域計画担当 TEL 0972-82-9528 / FAX 0972-85-0081

【会期】 令和6年8月27日（火）～10月14日（月・祝）

【主催】 大分県立歴史博物館

【共催】 津久見市教育委員会

【会場】 津久見市民図書館

【展示内容等】 石灰に関連する文化財について、大分県立歴史博物館所蔵の縋絵、左官道具等